

デス・エデュケーションを通じての宗教教育

ーキリスト教主義大学における試み

同志社女子大学現代社会学部社会システム学科

才 藤 千津子

I はじめに

20世紀後半の生物学的医学の発展は現代医療に大きく貢献し、その結果、医療技術や延命技術が大きく発達して人々の病院志向が高まった。しかし医学の進歩は、明るい面だけではなく負の側面ももたらしたといえるだろう。たとえば、慣れ親しんだ環境の中で家族に囲まれながらの死は、家族から隔離された病院での孤独な死にとって代われ、多くの人々にとって『死』が持っているつらさ、悲しみ、厳粛さを感じる経験がもちにくくなったとも言われる。加えて、行き過ぎた延命治療の末に亡くなる家族の姿に直面した人々の中から、過剰な医療ひいては病院死そのものへの疑問が呈されるようになった。より穏やかな人間らしい死に方、人間的な交わりの中での死に方を求める患者や患者家族からの切実な声だと言えよう。今日では、ホスピスや在宅での看取り、そしてそれを支える地域医療に新たな光が当たっている。また、厚生労働省の「人口動態統計年報(2010)」によれば、病院死の割合は2005(平成17)年をピークとして少しずつ下がり始めている。

今後日本は、医療を受ける患者やその家族がさまざまな選択肢の中から自ら納得できる死に場所や死に方を選ぶような社会に変わってゆくだろう。そのときわたしたち一般市民に必要とされるのは、「死」という不可解で恐ろしいものに向かい合い、自らのあるいは家族の死に方や看取りの方法について医療者と話し合い納得できる方法を選択する力であろう。そしてその際にはまさに、死をどうとらえるか、どのように死にたいのかといったわたしたちの価値観や人生観、宗教観が問われるのではないだろうか。今日死についての生涯教育が必要だと言われるゆえんである。

死生学 (Thanatology, death studies) という学問は、死生観など死に関わりのあるテーマについて、哲学・医学・心理学・民俗学・文化人類学・宗教・芸術などから広く学際的に取り組み、「死への準備教育」を目的とする学問である。その意味で死生学とは、単に「死」についての学問ではなく、死をみつめることによって「死までの生き方を考える」学問である。

西欧の大学において「デス・エデュケーション (death education)」という授業が提供されるようになったのは、20世紀後半のことである。たとえばアメリカでは、銃と暴力が横行する日常のなか、家庭内虐待や戦争のトラウマ、失職などによる深刻な喪失体験に苦しむ人々が多く存在する一方で、いつまでも若く元気なことを評価し死を否認しようとする文化への疑問が呈された。1963年にロバート・フルトン (ミネソタ大学) らによって死の教育コースが始まり、1966年には死の問題を扱う学術雑誌『OMEGA – Journal of Death and Dying』が創刊された。現在では、全米のほぼすべての大学において何らかの形で (たとえば独立した講義としてではなく別の講義の一部として) デス・エデュケーションが提供されているといっても過言ではないだろう。

デス・エデュケーション (death education) を「死生学の実践段階」だとして「死への準備教育」と翻訳し日本でのこの分野の草分けとなったのは、A. デーケン (2011) である。1980年代の後半に彼が日本での死への準備教育の必要性を提唱して以来、「生と死を考える会」などの市民活動を通して生涯教育としてのデス・エデュケーションが一般社会に広がって行った。加えて小学校から中学・高校・大学まで、学校でもさまざまな取り組みが行われるようになった。その名称は、授業内容や教師の考え方の違いなどによって、「生命の授業」「いのちの教育」「生と死を考える教育」「死の教育」「死を通して生を考える教育」などいろいろだが、共通しているのは、生命の尊さと死の現実とに正面から向き合いながら「死に向かって生きる」充実した生き方を探ろうとする姿勢である。

筆者は、2009年度より、本学の教養科目・キリスト教科目「キリスト教文化論C」(2単位) で8年間、現代日本人の死やグリーフ (悲嘆) の問題、日本人や聖書の死生観を取り扱って来た。この科目は学生が卒業までに取得すべき選択必修科目「キリスト教・同志社関係科目」のひとつであるため、

受講生の所属学部は多様である。また受講生の大多数はキリスト教に触れてまもない10代終わりの1回生か2回生である。シラバスには「デス・エデュケーション」というタイトルは明示していないが、授業テーマが「死や悲しみなどの人生の危機を通してキリスト教の人間観を学ぶ」となっていることや先輩からの口コミを通じて、学生たちの多くはこの授業が死やグリーフをテーマにした授業であることを事前に知っている。しかし死別や喪失体験といった繊細なテーマを取り扱うことから、筆者（担当者）は、この授業には自分の死生観や喪失体験をみつめる作業が含まれており、知的なものだけではなく感情面での作業も要求されることを、最初に学生に説明してきた。その上で、過去1年以内に大切な人との死別を経験した学生にはこの授業をとるのを翌年まで待つように勧め、この授業をとるかどうか迷っている学生は担当者（筆者）のところに相談に来るようにと促した。

なおこの講義は毎年春学期、今出川・京田辺キャンパスで1年おきに開講され、2009年度から2017年度まで（2012年度は筆者が在外研究のため欠講）8回開講し、毎年約70～130名、8年間で計約930名が受講した。

本稿では、筆者が8年間にわたって行ってきた講義の概要を説明し、この講義の背景や講義の目的について説明する。また、受講生の自由記述感想文の一部を紹介しながら、キリスト教主義大学での一般教養教育、キリスト教入門教育としてのデス・エデュケーションの試みを報告したい。

II 講義の概要と背景

まず、筆者が行ってきた講義「キリスト教文化論C」のシラバスの内容を以下に紹介したい。

授業テーマ：死や悲しみなどの人生の危機を通してキリスト教の人間観を学ぶ

授業の概要：私たちが生きていく上で、死や喪失体験などの人生の危機は避けて通ることができません。日本の文化や現代社会の価値観では、それらはマイナスのこととして否定されがちですが、古来宗教は、そのような人生の苦しみ悲しみを通して人は成熟してゆくのだと考えてきました。また

東日本大震災以来、生と死の問題や宗教について改めて考える人が増えたとも言われています。この授業では、私たちはどのように死や悲しみなどと向き合えばよいのか、キリスト教においてそのような問題がどうとらえられているかを学び、私たち一人一人がそこからどのように学んでゆけるかについて考えます。具体的には、今日の日本における自殺や医療化された死の問題、キリスト教や日本人の死生観、葬送儀礼について学び、また生の終末期にある人々や大切な人を失って悲しんでいる人々を支えるにはどうしたらよいかを考えます。

授業の目標：

- (1) 今日の日本における自殺や医療化された死などの問題を理解する
- (2) 自分の死生観や喪失体験について振り返る
- (3) 生の終末期にある人々や大切な人を失って悲しんでいる人々を支えるにはどうしたらよいかを考察する
- (4) キリスト教や日本人の死生観、葬送儀礼について理解する

授業方法：各回のテーマについての講義のほか、学生同士のディスカッション、教員への質問とそれへの回答などによって授業を進めます。ビデオ教材を活用します。

授業計画（カッコ内は準備学習課題）：

- 1 序論 現代日本社会における死、医療化した死、自殺の問題
— 「家庭での死から病院での死」「自殺者数の多さ」という現代日本の死の現実と、この授業の目的について説明する。
- 2 わたしたちの身の回りの死と喪失体験（自分の喪失体験について考える）
— デス・エデュケーションとは何かについて学び、死や喪失体験の普遍性について考える。
- 3 絵本で学ぶいのちと死（生命と死を描いた絵本から1冊お薦めを選ぶ）
— 「さよならエルマおばあさん」や「のにつき（野日記）」などの絵本を読みながら、生命の有限性、死の不可逆性について考え、愛と勇気によって最後の時まで意義深く生きた女性の生き方（死に方）を題材に議論する。
- 4 死別・喪失のストレスとセルフケア（セルフケアの例を考えてやって

くる)

—自分の喪失体験とのつきあい方、セルフケアの方法を学ぶ。

5 医療における人生の終末期のケア（小レポート①を提出する）

—一人の終末期の医療的ケアの実際を、在宅ホスピスのビデオを見ながら学ぶ。

6 グリーフ（悲嘆）の心理学（指定資料を読み内容を理解する）

—グリーフの心理学の主な理論と最近の研究動向について学ぶ。

7 子どもの喪失体験とグリーフ（指定資料を読み内容を理解する）

—グリーフを抱えた子どもを支える方法とその活動の具体例について学ぶ。

8 悲しんでいる人を支えるには(悲しむ人を支える具体的な方法を学ぶ)

—グリーフを抱えた人を支える方法を学び、ロールプレイをやる。

9/10日本人の死生観・葬儀—映画「おくりびと」（小レポート②を提出する）

—映画「おくりびと」を見ながら、登場人物の死生観や看取りのあり方を考える。

11 日本人の宗教観・葬送儀礼の意義（指定資料を読み内容を理解する）

—日本人の伝統的宗教観と葬送儀礼の意義、葬儀や墓地の現況を考える。

12 キリスト教の死生観（1）旧約聖書における苦難と死（指定聖書箇所を読む）

—旧約聖書の中から「ヨブ記」など知恵文学を取り上げ、その中に表現された苦難や死への向き合い方を考える。

13 キリスト教の死生観（2）新約聖書における死と希望（指定聖書箇所を読む）

—イエスの十字架と復活の物語、そのことについてのパウロの理解を学ぶ。

14 キリスト教の葬儀の実際—模擬葬儀（指定聖書箇所を読む）

—キリスト教の模擬葬儀を講師が牧師として執り行い、受講生は参加する。

15 まとめ—苦しみ悲しみを乗り越えるということ「希望とは」

受講生へのアドバイス：死や悲しみ、看取りに関するさまざまなトピックに

ついて、講義、ビデオ視聴、詩や美術作品の鑑賞、グループディスカッションなどを通じて学びます。「死」と「悲しみ」、「看取り」について考えることは、私たちの人生の究極の問題について考えることです。この授業では、解答を性急に求めるのではなく、一人ひとりが自分の体験と関心に照らし合わせて考える過程を重視し、学生の主体的な参加を求めます。できれば受講生自身の死生観や身近な死の体験などについても、振り返る機会をもちたいと思います。

フィードバックの方法：教室でまとめて解説するか、出席カードに書かれた質問やコメントに教室で答えます。また授業の前後に質問に答えます。

評価方法：平常点60%（毎回出席カードに書くコメント、小レポート2回を含む） 期末レポート40%

小レポートのテーマ：レポート（1）この授業をとって以来、あなたの死についてのものの見方考え方（死生観）はどのように変わりましたか？もし変わらないとしたら、何がどのように変わりませんか？800～1000字で書いてください。

レポート（2）映画「おくりびと」を見て、以下の問いについて800～1000字であなたの考えを述べてください。①この映画の中で描かれた「納棺師」が葬儀で果たしている役割はどんなものだろう。②この映画の中で表されている「死生観」は、たとえばどんなものだろう。

期末レポートのテーマ：以下うち2つのテーマを選んで、それぞれ1000～1200字で論じてください。

- （1）現代日本人の死や葬儀のあり方の特徴を論じ、それについてのあなたの経験や考えを述べてください。
- （2）大切な人、愛する家族を失って悲しんでいる人を支えるにはどうしたらよいか、授業で学んだことをもとにしてあなたの経験や考えを述べてください。
- （3）旧約聖書・新約聖書の死生観の中で、共感できるものとその理由を論じてください。
- （4）自分が興味のある授業に関係するテーマを選んで自由に論じて下さい。

教科書：特になし。プリントを配布します。

参考文献等：(省略)

この講義のもととなったのは、筆者が1990年代後半から2000年代前半にかけてのアメリカ留学中に受講したいくつかの死の授業である。たとえば、ボストンの神学大学院で受講した「死別からの回復」や「死と死にゆくこと—牧会的・神学的パースペクティブ」という授業では、死と死へのプロセスにおける喪失体験とグリーフの心理、信仰の役割やパストラルケアの方法、死についての神学的考察などのテーマについて学んだ。また、病院牧師（チャプレン）としての病院での合計1年3ヶ月のフルタイムの臨床訓練（臨床牧会訓練、Clinical Pastoral Education, CPE）では、集中治療室や救急病棟で危機的状況にある患者さんやその家族への危機介入、緩和ケア病棟で亡くなってゆく患者さんや悲しみにあるご遺族への慰めなどの経験を通して、病气や死に直面している人を援助することを学び、加えて牧師としての自分を見つめ自分の信仰が拠って立つところを問い直す作業を経験した。これらの実践経験によって私がどれだけのものを身につけられたかは、よくわからない。しかし、大きな悲しみや危機のなかにある人を支援する際にもっとも大切なのは、うまく役に立つことは出来ないかもしれないけれども、理屈を越えてそのつらさの場に共に踏みとどまろうとする心がまえだ（稲沢、2017）ということを経験的に学ばされたように感じている。

Corr, Nabe & Corr (2009) によれば、デス・エデュケーションの主な目的としては以下の6つがあげられる。①自分を良く知り、有限な人間存在の強みと限界を知った上で人生をよりよく生きることを学ぶこと②終末期のケアや葬儀など、死に関する社会的サービスについての情報と選択肢を学ぶこと③患者としての自己決定など、市民としての公的な役割を果たすことを学ぶこと④ケアワーカーなど、死に関する職業につくための能力を高めること⑤死にまつわることがらを効果的にコミュニケーションする能力を高めること⑥人の人生が、どのように死にまつわることがらと影響を与え合いながら進んでゆかについて理解すること。

デス・エデュケーションでは、死や死別を扱うというテーマの性質上、知的な側面だけではなく受講者の感情的側面にも触れることが必要とされる (Balk, et. al., eds. 2007, 332-333)。デス・エデュケーションとは死の人間の側面、

感情的側面についての教育であり、その中心にあるのは、喪失体験に伴う悲嘆にどう対応するか、喪失体験に伴う心の痛みをどのように癒すかという問題である。そのために、教師による一方的な講義だけではなく、グループでのディスカッションや個人的体験のリフレクションなどいろいろな学習方法を用いる。よって教師は、この授業がカウンセリングを提供するわけではないことを明確にすると同時に受講生の死やグリーフに関する体験についてセンシティブでなければならぬし、授業での経験によって心理的ケアが必要になった学生がいれば彼らをサポートできなければならない (International work group on death, dying, and bereavement, 1992, 59-65)。

実は、筆者がもっとも難しいと感じながら長年工夫を重ねてきたのが後者の2点である。この講義を受講したことによって過去のつらい体験の傷が開くような経験をする学生が出てはならないが、かといって死や喪失に関する自分の体験から完全に眼をそらしたままではこの授業の本当の意味はない。学生たちが心理的に安全だと感じながら死や喪失の体験をみつめることができる授業にするためにはどうしたらよいだろうか。

このための方策として、前述のように、過去1年以内に大切な人との死別を経験した人にはこの授業をとるのを翌年まで待つように勧めるほか、授業中につらくなったとき、感情が高ぶったときには、静かに手をあげたあとしばらく教室から離れてもかまなわないと言ってきた。悲しい場面のある映像資料を見せるときには、その大まかな内容を事前に学生たちに伝え、前もって気持ちの準備ができるようにもしている。またグループでの話し合いの際の「約束」として、①ここで語られたプライバシーに関わることは外の人に言わないこと、②つらい思いをしている仲間がいたら互いにサポートし合うこと、③決して無理をしないこと。話したくないことは話さなくてよい、④つらくなったときには、授業のあとで講師にその旨伝えてほしい、という4点を必ず事前に示すようにしてきた。

Ⅲ キリスト教教育としてのデス・エデュケーション

大学生が死の問題を考える際に「宗教」が必要とされる意味は、①死についての議論の枠組みを提供するため、②死への恐怖をみつめそれに対処する

ため、③死と死後の世界についての疑問に答えるため、④宗教の起源と葬送儀礼の役割を理解するためだと言われる (Balk et. al., eds., 2007, 321)。死の問題を取り扱うのに宗教の教えや宗教儀礼に全く言及しないとするならば、死の体験の全体像を把握するのは実際問題として不可能であるといえよう。では、この授業の一般学生へのキリスト教教育としての意義はいったい何だろうか？

1. ひとつ目は、死の現実を理解する機会を提供すること、すなわち生命の有限性と死の普遍性・不可避性・不可逆性と、今日の日本における死をめぐる状況を考える機会を提供することである。日本は、先進国の中では極めて自殺率の高い社会である。『平成29年度 自殺対策白書』では日本の自殺者数総数は減少しつつあると報告されている。しかし15～39歳では自殺が依然として死因の第1位であるなど、日本の若い世代の自殺は深刻な状況にある。いかに死ぬかについて考えることは、死ぬまでいかに良く生きるかを考えることである。死が悲劇や絶望に終わるのは、多くの場合、死の事実そのものではなくその人の死に方や死ぬまでの人間関係のあり方によるのだとも言われる。受講生は、授業の中で視聴覚教材などを通して死にゆく人やその家族の実際の姿に触れ、生きるとはよく死ぬとはという問題についていろいろなことを感じ、考える経験を持つ。神から与えられた生命の意味について、また人として有意義な生を生きるとはどういうことかについて考える機会となることが望まれる。

2. 二つ目の目的は、受講生が自分の死生観や喪失体験を振り返る機会を持ち、同時に生の終末期にある人々や大切な人を失って悲しんでいる人々を支える態度や方法を学ぶことである。受講の時点ですでに受講生の多くが身近な人の死を経験しており、グリーフケアの理論と実際について知りたいと考えている。

筆者は毎年授業の始めに受講生に対して簡単なアンケートを実施してきたが、そのなかの「あなたは、身近な人や友人を亡くした体験がありますか？」という質問に対して、8年間の回答者総数920名のうち77.5%となる713名が、家族(祖父母、父母など)や友人、教師など身近な人の死を「経験したことがある」と答えている。「ない」と答えたのは、207名(22.5%)である。ま

た、「あなたは、死について自分で考えたことがありますか？」という質問に「ある」と答えた学生は83.0% (760名)、「ない」と答えたのは156名 (17.0%)、「あなたは、死について家族や友人で話したりすることがありますか？」という質問に「ある」と答えたのは323名 (35.3%)、「ない」と答えたのは593名 (64.7%) である。

この結果から推察されるのは、受講生の約8割が身近な人の死を経験し、死について何らかの形で考えたことがあること、しかし6割以上が自分の気持ちを家族や友人に話していないということである。授業後に提出するコメントには、「今まで家族の死について誰にも話したことがなかった」「友達が家族を亡くして悲しんでいるときに何も言ってあげられなかった」「祖母が亡くなろうとしているが、何をしてあげたらよいかわからない」という声が寄せられている。一方で、「この間のレポートに悲しくないと書きましたが、涙は出るんです。本当は悲しいと思っているんでしょうか？よくわからない。」「(授業の中で見せた映画を見て)『悲しい』と感じましたが、何で悲しいのか分かりませんでした。」と書いた受講生もいる。自分の中のネガティブな感情に気づきそれを表現することが苦手な学生にとって、この授業はそれぞれが自分の人生の悩みや苦しみと対話しながら自分を見つめる機会ともなっている。担当者は、わたしたちはあるがままで神に受け入れられ愛されているということや、悲しみの中にある人を慰めるには何が大切かということ、自らの態度を通して受講生たちに伝えてゆきたいと考えている。

3. 三番目に、葬送儀礼の重要性を理解することである。葬儀は残された者の「喪の仕事(グリーフワーク)」を助け、愛する者を神のもとへと送る儀式である。遺族が悲しみを消化してゆくグリーフワークにおいて、キリスト教を始めとした伝統宗教や新しい形の葬送儀礼が果たす意義について、看取りや葬儀に携わる人々の役割について考える機会を提供する。

4. 最後に、宗教のもつ死生観の枠組みを提示することによりグリーフや喪失体験の意味を考える際の助けとすることである。キリスト教では、死を越えて永遠の生命への希望に生きることを語る。ここで言う永遠の生命とは、無限に生きることを意味するのではなく、「今ここでの生命の質」のことを指しており、わたしたちが新しく生まれ変わること、イエス・キリストを信じて神と隣人と共に愛に生きること、意味ある生を生きることである(ミラー、

1995、142)。キリスト教では、救い主イエス・キリストの十字架での死は、復活という新たな生命との関係のもとに語られる。人々から裏切られ、苦しみを受けて十字架の上で死んだイエス・キリストは、三日後に復活して弟子たちのもとに現れた。イエスと弟子たちの絆は死によっても断ち切れなかったのである。生きている者と死んだ者とはこの世ではもはや会うことはないが、その絆は死をもって完全に断ち切られた訳ではない。「愛する力と愛される機会とを失わない限り、死は耐えうるものである。」(ミラー、1995、44)

学生の多くは、授業の始めにあたって「死は怖い」「死は暗い」「死について考えたくなかった」というコメントを書く。しかし、「はじめに」でも触れたように、これからの日本人は、望むと望まざるとにかかわらず、年老いてゆく自分自身や家族の死に方や死に場所について考え、各自が主体的な選択をすることが求められる。過去にほとんどキリスト教に触れたことがなかった受講生が多数を占めるこの授業では、死という究極的な問題を「希望」「新たな生命」という新しい視点から考える機会を提供する。もちろん、講師はキリスト教の信仰や価値観を受講生に押し付けることはせず、学生たちが自分なりに納得しながら考えるプロセスをサポートするのみにとどめている。以下は受講生のコメントである。

「講義を受ける前は、死に対してマイナスなイメージを強く持っていました。しかし、死そのものがマイナスなのではなく、死をどのように受け入れ、死ぬまで人生をどのように生きたかによって、マイナスにもプラスにもなるのだと思いました。死は無ではなく、新たに何かを手に入れるとき、出会いの経験を与えてくれるときなのだと思います。」「私は死を終わりと考えていました。自分と死を迎えた人との関係の終わりとも思っていました。しかし、亡くなった人たちは自分の一部としてずっと自分と関係を持ち続けていけるものだし、これから先もずっとあります。せいっぱい自分の人生を過ごさる姿は何よりも美しいし、その姿は永遠だと思われました。」

V おわりに

この講義では、学生が死と喪失体験について学びながら、人が生きてゆくというのはどういうことなのか、死ぬとはどういうことなのかを考える機会

を提供してきた。生の一部として死があること、また死と死にゆくことの中にも生の輝きや希望があることを、受講生たちに知識としてだけではなく自分の問題として考えてほしい、そしてそれが彼らにとって宗教的問いかけ、人生の究極の意味の問いかけへと導かれるきっかけになればと願いながら教えてきた。8年間を終えてみて今筆者が最も強く感じていることは、この講義は学生と教員とが共に、人生の意義、生命の意味、死の意味について考える「共同作業」であり、そのなかでもっとも学び、もっとも謙虚にさせられたのは、実は教師自身だということである。この8年間の学びを支えてくれた大勢の受講生に感謝する。

参考文献

Balk, D., et al. eds. (2007), *Handbook of thanatology: The essential body of knowledge for the study of death, dying, and bereavement*, New York: Routledge.

Corr, C. A., Nade, C. M. & Corr, D. M. (2009), *Death & dying, life & living*, 6th ed. Belmont, CA: Wadsworth.

デーケン、アルフォンス (2011) 『新版死とどう向き合うか』NHK 出版

稲沢公一 (2017) 『援助関係論入門―「人と人との」関係性』有斐閣

International work group on death, dying, and bereavement, “A statement of assumptions and principles concerning education about death, dying, and bereavement,” *Death Studies*, 16 (1992), 59-65.

厚生労働省「平成29年度 自殺対策白書」p.12. Retrieved November 29, 2017 from <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/17/index.html>

厚生労働省「平成22年 (2010) 人口動態統計年報 主要統計表：死亡の場別にみた死亡数・構成割合の年次推移」Retrieved November, 29, 2017 from <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/deth5.html>

ミラー、R. C. (1995) 『死の教育』鍋倉勲訳、ヨルダン社

追記：学生のコメントは、本人が特定できないように言葉を変更して引用した。